



食育だより

令和3年度 給食週間号

合志楓の森小学校・楓の森中学校



全国学校給食週間です

1月24日～30日

昭和20年、日本は戦争が終わったばかりで食料が不足していました。そのため、栄養失調の子どもたちがたくさんいました。そのころの小学6年生の平均は、現在の小学4年生の平均くらいのおおきさだったそうです。日本の様子を見てアメリカやアジア救済委員会（ララ）などの援助がたくさん送られてきて、昭和21年12月24日に学校給食が再開されました。この日は学校が冬休みのため、1カ月後の1月24日から1週間を、給食に感謝する「全国学校給食週間」としています。学校給食の意義や、役割について理解と関心を深め、学校給食のより一層の充実と発展を図ることを目的としています。

給食の歴史をふりかえってみましょう



明治22年 学校給食のはじまり

山形県鶴岡市の忠愛小学校で、昼食のお弁当を持ってくるのができなかった児童を対象に、無料で昼食（おにぎり・塩鮭・漬け物）を提供されました。その後、この取り組みは全国各地に広まりました。

戦争がはじまり、昭和19年から中止される



昭和22年 戦後の給食開始

アメリカやアジア救済委員会（ララ）、連合軍などから物資援助があり、給食が再開されました。ミルクは、脱脂粉乳に、砂糖とビタミン剤を加えたものです。温かく湯気が上がり膜がはった独特な風味だったそうです。

現在の給食



昭和25～30年頃

アメリカから小麦の援助を受け、パン・ミルク・おかずがそろった「完全給食」が実施されるようになりました。



昭和51年 米飯給食が始まる

パンや麺が中心の給食でしたが、この年から米飯の給食が始まりました。はじめは月1回でしたが、現在では週3～5回が米飯給食です。

現在は、栄養バランスはもちろんのこと、給食をとおして様々なことを知ってもらうため、行事食や郷土料理、地場産物を活用した献立などを実施しています。学校での食育の教材としての役割を担っています。